

余 録

編 集 余 聞

稻 葉 正 夫

一、終 戦 異 聞

服部さんは、大陸戦線から帰還以来専心戦史編纂に没頭した。したがって、昭和二十五、六年頃にはいつでも刊行していい状態にあつたのだが、各方面のすすめにもなかなかウンといわなかつた。

服部さんは何故躊躇したか。もちろん当時はまだ公職に在つたし、又時期尚早ということもあつたであらう。しかし最大の原因は、著者自身告白しているように、如何に内容が豊富であらうとも、これを権威づける史実そのものに欠けるところがあつたからであらう。

ところが講和条約発効と相前後して、史実そのものである機密書類が出た。そしてそれが著者に提供された結果、服部さんは一切の公職を辞して戦争史編纂一本に心魂を傾けることになり、改めて書房の希望にも応ぜられることになつたのである。

だが、このように著者を自信づけ、本書を権威づけた重要書類とはどんなものであらうか、又どんないきさつで今まで保管されて来たか？ その事実を、読者各位に御紹介しよう。

戦争史の根幹となる公的記録と云えば、全般戦争指導関係では「大本営政府連絡会議」に関するものであり、陸軍に配布され整理せられたものは、次のように殆んど全部が保存されていたのである。

一、機密戦争日誌

(秘匿名昭和日記甲)

二、大本営政府連絡会議審議録（所謂「杉山メモ」）（同右 乙）

三、大本営政府連絡會議決定綴（同右 丙）

四、御前會議議事録（同右 特）

又大本営作戦関係では、大体左記のように分類整理されていたが、本書には命令及び指示の大部分並びにその他の一部が利用されている。

一、大陸命（海軍—大海令）……所謂大本営命令

二、大陸指（海軍—大海指）……総長の指示

三、上奏書類（作戦計画及び大命発動等に関する上奏）

四、機密作戦日誌（往復軍機電報が主）

これらの書類は市ヶ谷の国際軍事法廷では、終戦の際焼却されたと言言され、事実、終戦直前陸軍の最後を叩く業火のような、あの台上を蔽うた焚書の黒煙を知る世間一般も既に存在しないものと信じていたものである。

書類焼却の命令で、陸軍省部の機密書類はその大部が失われた。だが、あの混乱の中ではほんの一部ではあるけれども、最も重要なこれらの書類が、実にそれぞれ庶務担当の係將校によつて、ひそかにかくされたのである。その後これは、更に知人たちにリレーされ、都内外数ヶ所を転々しながら分散保管せられていたものであった。これらの人々は「何か泥棒でもしたように追われる者の辛さを味つたものだ」と述懐していた。つまり、日本政府はもとより、軍の後仕末をしていた復員局も知らないままに、少数の個人の手で守られて来たというのが真相である。

二、大本営うわさの聞きがき

最高戦争指導や、陸海軍に対する大本営命令が決定され、又発令される迄には、常に幾多のはげしい論争や経緯が伴つていた。このことは旧天皇政治下の日本では宿命であつたかも知れぬ。

即ち御前に持出すときには、陸海軍省部間、統帥部、政府間の妥協が出来てから、そして又陸海軍協同の調整がデッチあげられてからを例とした。結局無当責の天皇陛下に御裁可を仰ぐには、これが一番正しいとの信条の下に、政略、戦略が決定されていつたのであつて、所謂最高の政戦略統合機関は勿論、戦略統帥の強力な一本化もなく、又出来なかつたというのが実相であつたようである。

これは、本書を読むとき、一寸気をつけると、至るところでピンと感ぜられる。しかし著者は、極めて慎重にしかも綺麗な表現を用いているので、うつかりするとすらすらと決定され、且つ実行されていつたように感ぜられ易い。そこで次に、「大本営うわさの聞きがき」として赤裸々な裏面の真剣且つ深刻な事実の一端をお伝えしよう。

その一、田中作戦部長罷免問題

ガ島の激突初動は、陸軍が全然知らぬ間に、連合軍反攻の第一波として生起した作戦であつたことは本書に明らかにされている。つまり海軍に引摺られた陸軍が、深入りし抜き差しならぬ破目に陥り、戦争開始以来始めて部内に大論争を捲き起し、あげくの果てに、特記すべき作戦部長および作戦課長罷免にまで発展した。

田中新一中将、佐藤賢了少将、鉄拳の応酬

ガ島を繞る船舶問題は、十一月十六日以来深刻な様相を呈しつつ妥協を重ねながら十一月二十一日大本営政府連絡会議で、遂に第一次増徴分十七万五千総噸の決定発動を見たのであるが、まだ陸軍の第二次分九万五千総噸に就ては十二月五日に持越された。しかもこれは「更に国力造成上爾後の徴備或は損耗補填等を詳細検討の上のことにしたい」という東條首相の言によつて、その後陸海軍及び企画院の間で、再検討が続けられた。

しかし、お互にその主張を固執して堂々めぐりするだけで、結論を得られないままに、とうとう第二次徴備期日たる十二月五日になつてしまつた。

そこで今日五日には、おそくとも政府の結論が出るというので、統帥部は首を長くしてその結果を待つていた。即ち田中作戦部長は、服部作戦課長を伴い、午後六時頃市ヶ谷を降りて三宅坂の陸海軍集会所で食事した後麹町三

番町の田辺次長宿舍へ行つた。

応接間で三人が待っているところへ、これも統帥部の接衝責任者である戦争指導班の種村中佐も来た。

時刻は午後八時を過ぎていたことと思う。漸く佐藤軍務局長がアタフタと馳けつけた。

「どうもおそくなりました」

「オイッ！ 佐藤！ どうだつた？」

「それがネ——」

と局長は少々困惑の面持で立つたまま答えた。

「ナニッ！」

部長がスッと立ち上つたと思つたら、矢庭に局長の頬に鉄拳がとんだ。局長は一瞬呆然とした。しかし続いて鉄拳がとぶに及び、猛然と反撃に転じた。

逸早く次長が割つて入り、「バカな！ やめんか、二人とも興奮せずに話をしろ！……やめんか？」と泣かんばかりに制止した。

一方、種村中佐は、早く局長を大臣の許へ連れて行くべく、秘書官に電話したが、丁度この日は土曜だったので静養させるためか、所在を明らかにせず「明日にして呉れ」と繰返すばかりで、要領を得ず、佐藤局長は取敢えず次官（木村中将）宿舍に引揚げた。

次いで次官から電話があつた。次長以下四名直ちに次官々舎へ行き改めて次官の肝煎りで応接間で握手し、ウィスキーをあけながら拾収策を語り合い、次官の許を辞去したときには既に朝の四時をまわつていたという。

部長、大臣・次官に詰め寄る

六日夜、場所は総理官邸二階日本間である。同日次長と企画院総裁との間には、妥協案が出来たのであるが、東條大將は総理の立場から、昨日の決定の線以外は頑として応ずる色がなかった。

この部屋に入っていた人は、陸軍省側大臣の外に次官、佐藤軍務及び富永人事両局長、統帥部側は田辺次長と田中部長だった。尚別室には成行を案じつつ赤松祕書官、真田軍務及び西浦軍事の両課長、それに種村中佐がいた。

最初局、部長は二人だけで昨日のチャンバラも忘れたように打合せした後、大臣室へ入った。田中部長の声だけがだんだん大きくなる。そのうちに田辺次長がバタバタ駆け降りてくる。種村中佐はこれ連れ戻すという一幕もあつた。

田中部長は「統帥の尊厳を確守しなければならぬ。ソロモン方面の第一線將兵に対する中央統帥部の義務を遂行しなければならぬ」とのかたい決意をもつて、一切の責任を一身に引受けて切言したということである。

「大臣は総理だけでなく、陸軍大臣でもあるのです。何とか再考していただきたい」

この言葉に一切が尽きていると思う。ただ問題は、解決を見ずに愈々解散という間際に木村次官がその言動を詰問した。これに対し「ナニッ！」以下一、二やりとりがあつたので、大臣は「統帥の根本は服従にある。しかるにその根源たる統帥部の重責にある者として自己の職責に忠実なことは結構だが、もう少し慎しまねばならぬ」と極めて穏かに訓された。

解散後富永人事局長は直ちに総長官邸へ自動車をとばした。罷免更迭の相談だったのであろう。翌七日上奏、先ず参謀本部附発令、つづいて南方軍総司令部附に転出された。

その二、聯合艦隊のレイテ突入作戦顧末記

史上空前のものであつた聯合艦隊のレイテ突入作戦については、本書に詳細誌されているけれども、例の如く落ち穂拾いの愚を敢えて繰返しながら、もう少し蛇足を加えたい。

出撃作戦とタンカー問題

油の問題解決のため、政府当局には比島決戦直前「聯合艦隊を解隊してもらいたい」とさえ要請する向があつたのが実情だった。しかるに海軍は比島決戦発動に伴い、聯合艦隊の出撃作戦を企図し、これに要するタンカー六隻

の徵備を申し出て来た。しかし常識から考えても、不可能に等しい作戦である。やぶれかぶれの決戦思想だ。タンカー徵備に反対すれば、聯合艦隊の出撃が阻止されるというなら、陸軍は飽くまでタンカー徵備に反対しようという強い意見が、省部の間に起つてきた。だが第一部（作戦）としては、真向から反対することも出来ず、ウヤムヤのうちに承認する外なく、遂に十月二十一日の最高戦争指導会議で、優速タンカー六隻、六万噸徵備が条件附で認められたのである。

それでは、陸軍の作戦部はどうであつたか？ これにも相当のいきさつがあつた。これより先、渾作戦（ビアク突入作戦）実施のときにも、これに類したいきさつがあつたということである。このときは、陸軍側からは東條総長も出席していた。そして矢張り榎尾海軍大佐の叱咤を受けたような恰好になつた。今度もまた同大佐の怒号で幕を閉じた、所謂水交社会談があつた。

水交社会談—海軍側主張

陸軍作戦部も実は、この海上決戦には不同意だつたので、この問題に関し懇談を要求し、十月十九日夜、水交社で話し合うことになつた。同夜会合した面々は、海軍側中沢作戦部長、田口作戦課長、部員榎尾大佐等であり、陸軍側真田部長、服部課長、部員杉田、高山両大佐であつた。海軍側は、先ず計画の概要を説明し「今こそ海上決戦を求める好機であり、この機を逸しては遂に決戦の時機を失い、イタリー艦隊の轍を踏むこととなる」と強調した。又これが決行については、及川総長はもとより米内海軍大臣も既に同意しているということであつた。

陸軍側の反対理由

これに関し陸軍としては、次の理由からこの作戦を中止することが、全局上有利ではないかと述べた。

理由の第一は、この作戦が万一失敗した場合一口にこそ出さなかつたが、成功の算少いと考えていた—比島西側のスール海方面は勿論、南支那海、東支那海ことごとく敵の制圧下に入り、日本本土はやがて孤立することになるであらう。我が聯合艦隊がたとえ無為にしてイタリー艦隊の如き汚名をきても、シンガポール附近に敵存するなら

ば、その無言の威力によつて敵の傍若無人の振舞を控えさせるであらうということであつた。

第二の理由は、開始されたばかりのレイテ作戦は、航空決戦を以て速かに戦場の主導権を掌握しなければならぬ。しかるに母艦兵力を持たない主力艦隊が、サンベルナルジノ海峡を東航して海上決戦を挑むとき、大事な我が航空兵力の一部をこれが掩護に割かなければなくなることは、非常な痛手であるというのであつた。

榎尾大佐の怒号―陸軍敢えて阻止せず

このように種々論議が続いたが、榎尾大佐は、昂奮して「今出なければ戦さは負けてしまう」と、卓を叩いて怒号した。「何を云うか、言葉を慎しみ給え」と、真田少将がたしなめるといふ一コマもあり、座が白けてしまい結論を得ないままに散会した。

翌二十日朝、真田部長から、昨夜の模様を梅津参謀総長、秦次長に報告した。

総長は「これは海軍独自の作戦だ、海軍大臣まで同意しているものを陸軍が阻止するのは行き過ぎであらう」とのことだつたので、陸軍は、意見としては昨夜の通りであるが、これ以上は不同意を唱えないことに決定し、この旨海軍に通報した。かくしてあの作戦は、全軍注視の下に断行されたのである。

「天佑を確信し全軍突撃せよ」

この小見出しの文句は、十月二十四日夕刻巨艦武蔵を失つた栗田部隊（主力艦隊）が、日吉台の聯合艦隊司令長官から受けとつた敵命飛電だつた。この敵命を受けとつた栗田部隊は、決意を新たにしてサンベルナルジノ海峡に向つたが、結末の千載恨事は著者の筆につくされている。小沢部隊が、自らを犠牲にして善戦、牽制の大役を果し、栗田部隊も大和の初弾命中という幸先よい先制攻撃を以て火蓋を切り、混乱する敵を急追してレイテ湾至近距離まで進撃しながら突入せず、志摩部隊また先行した西村部隊の全滅を目前にし且つ電命を承知しつつも意味なく避退してしまつた。敵側情報から察しても残念無念の極みであつた。

広瀬中佐は何故再現しなかつた？

そもそもこの作戦は、死中に活を求める悲壮な作戦であつた。即ち無為にして自滅するよりは、むしろ超弩級戦艦武蔵以下の海上部隊を敵の上陸点に突入せしむるに如かずとし、これこそ帝国海軍海上部隊に残された唯一の道であると信じ「勝利か然らずんば死」という将兵一同の堅い決意の下に、決行された筈であつた。又その真相は、艦隊関係者が航空関係者からの白眼嘲笑に堪えかね、自ら選んだ死地だともいわれている。しかし結局、この悲痛な決意が、実行部隊には徹底しなかつたのであろうか？

新東宝映画「戦艦大和」に憶う

編集子がこの聞き書きを書いているとき、奇しくも映画「戦艦大和」の宣伝ビラが眼についた。レイテに突入せずに沖繩作戦を邀えた戦艦大和に、遂に運命の日が来た。

沖繩に突入すべく、単身しかも丸裸同様の状態で南九州南端を離れるや間もなく、群がる敵機の餌食となつて、三千の将兵と共に海底深く姿を没したのである。そして「戦艦大和」の戦記を生み、今また「戦艦大和」が映画化されるという。本書が各位の前に出る頃には、この映画も封切されていることであらう。

その三、山下將軍とレイテ地上決戦

「悲劇の將軍 山下奉文」という映画を見た。当然のことであるが、本書の各巻に散見する山下將軍の映画化を見ているようで、何とはなしに親しみを覚えた。

山下將軍が、最初レイテ決戦に不同意だつたことも事実である。ただあの映画は、作戦部長から説明を聞いて決断を下したことになるが、あれは作戦課長だつたようだ。

大本營、南方軍の新企圖—レイテ決戦

大体比島では、航空と海軍とはその全域で決戦を行うが、地上決戦は呂宋島のみとのことで、諸般の準備が進められていた。ところが九月中旬、敵機動部隊が比島を奇襲してから、南方軍には従来の構想を修正する必要があるという考えが抬頭した。それは、敵が中南部比島に上陸してそこに基地を推進したなら、呂宋の地上決戦は成り立

たないのではないか。むしろ呂宋以外でも陸海空の総力決戦を指導するのが適当ではないかという意見だった。

敵のレイテ上陸に際し、大本営は既定方針に従い、十月十八日捷一号決戦を発動したが、海軍の台湾沖航空戦の赫々たる戦果―甚しい誤認だった―が、陸軍は当時信じていた―から判断して、今敵がレイテに上陸したのは、正に乘ずべき過失で、敵撃滅の神機到来として、従来の方針を一擲し、レイテに総力決戦を指導することとなった。

大本営、南方軍、方面軍間の調整

この大本営の企図は、南方軍には異論なかったが、山下方面軍は容易に同意しなかった。即ち方面軍は、今にわかに計画を変更することは、輸送力、準備等の関係上成功の算少いというにあつた。そこで寺内総司令官は、二十日山下將軍を招致して意志の疎通をはかった。そして同日、レイテ決戦完遂のための命令を下した。爾後方面軍は、レイテ決戦遂行のため兵力輸送等を処理しつつも、なお何か釈然たらざるものがあつたようである。

大本営は、決戦命令発令後、二十日に杉田大佐を、二十五日には秦次長を、又三十日には服部課長を作戦連絡のため比島に派遣した。

服部大佐は、三十一日南方軍に諮った上、山下方面軍司令官をその司令部に訪ね、武藤參謀長同席の下に、前に述べたような大本営決心変更の経緯を詳細説明した。山下將軍は「そうだったのか、それで事情がよくわかつた。方面軍はこれから全力を挙げてレイテ決戦を遂行しよう」と述べられ、愈々レイテ決戦の腹を決めたのであつた。しかし、レイテは敗れ去り、比島は、山下將軍の悲劇を以て幕が閉じられた。だが、国軍の運命をかけた決戦に臨んで生起したこれらの諸問題は、大本営の最初の構想と共に依然として残り、永く後世史家論議の焦点となることであらう。

所懐の一端(遺稿)

服部卓四郎

昭和二十八年六月七日、約一千五百頁に上る大東亜戦争全史を脱稿して感慨真に無量である。感慨の一は、年来志して来た修史の第一歩を印し得た感激であり、その二は、戦争責任者の一人である私が、終戦八年にして、今日この稿を通じて更めて戦争の全貌を回顧反省し得た感懐である。

この戦争史の執筆に当り、主観を交える表現は努めて之を避け、事実と経緯の叙述のみに限定すべきことを期したのであつたが、今読み返して見ると、やはり若干の主観を交える結果となつた。しかし、この主観は戦争に関する日本の立場又は軍の行為を弁護し、事実を曲げて殊更に正当化し、少しでもわれわれの嘗ての責任を軽減しようとするような意図に出たものではないつもりである。

大方の書評の中で、歴史的展望の一章が特に批判せられてゐるやに感ぜられる。批評の内容については直接詳細にうかがつてゐる訳ではないが、私の想像するところ、この戦争は、所謂軍閥が無理矢理に起したものであると信じてゐる人々が、この章に於て著者が戦争原因とも見做し得る事項を取扱つたことに對し、抱かれる不満であらうと思う。この戦争の発端に関する問題は、単に本戦争史批判の好題目たるのみならず、戦争という本質問題について考察を進める上に於て、極めて重要なことと思われるので、左に一言したいと思う。

大東亜戦争の発端が東條氏乃至は日本軍のみの侵略意思によつて、單純に始められたものとの史論に立つならば、人類最高の悲劇たる戦争を将来防止する方策も亦自ら極めて簡單になつて来る。しかし、私は左様には思はない。私の考えでは、戦争原因が蘊釀されていないのに、戦争当時国の一方の指導者の意思のみによつて開戦し、而して戦争を遂行し得るということは、昔の英雄戦争時代ならばいざ知らず、全体戦争、高度の国家総力戦の現代戦に於ては不可能なことであると思う。終戦後、日本では東條があつた戦争を起したといつてゐる時に、米国では太平洋戦

争はルーズベルトの意思と作為とによつて勃発を見るに至つたものであるとの、根拠ある幾つかの著書、論文が公にされているようである。

私の考えによれば、戦争というものは、必ず原因と動機との二つの要素を充したときに起るものと思う。原因はガソリンの充満する作用であり、動機は点火の作用である。どちらか、一つでは大事には至らないのである。一九一四年、第一次世界大戦に於ける、セルビアの皇太子に対する拳銃の一発は点火であつた。この点火が戦乱に拡大する前に、欧洲の国際情勢は、英仏両国と独逸との対立を中心として、ガソリンは天地に充満していたのである。

一九三四年には、ユーゴスラビアの皇帝がマルセイユに於て暗殺されたが、この大きな点火作用は、ガソリンに導火する程の国際的緊迫情勢がなかつたがために、戦争にはならないどころか、平穩に済んでしまつた。満洲事変、支那事変の発端には、柳条溝といい、蘆溝橋といい、この点火の前に、既にガソリン充満の作用が存在していたのである。この原因、動機の二つの作用のうち、原因は殆んど例外なく、長期間に亘り戦争決意とは別に、交戦国双方に於て、これを作るものであり、動機即ち点火は、多くの場合微妙なもので、どちらから手を出したかわからないことが多いけれども、意志的には火蓋を切る瞬間は少くも一方的なものであると思う。

大東亜戦争について考えて見ると、日米間の戦争原因としては遠く遡つて、日本と英米との経済的対立、軍縮問題、移民問題、支那大陸に於ける政策上の衝突等を始め、満洲事変、支那事変、日独伊同盟、第二次欧洲戦争の勃発等、数々の要素を挙げることが出来ると思う。開戦の動機としては七月の日本軍の南部仏印進駐に伴う米英蘭の対日全面禁輸であり、形式的には十一月のハルノートであつたと見ることが出来るのではあるまいか。昭和十六年七月二十八日の南部仏印進駐に当り、松岡外相だけは、この行動が日米戦争に発展するぞと予言したが、其の他の政府、大本營の首脳は、今から考えれば迂濶なことながら、之が全面戦争になるとは判断していなかつた。この進駐の事態に直面した米英蘭は、直に対日全面禁輸を発動したが、その首脳達も、之を以て開戦を予期するよりも寧ろ日本の屈服を望んだものと思われる。それ程戦争の発端は、その渦中に於ては判定し難いものである。

又十二月初頭に、八日の開戦日が決定せられて以後、大本營作戰主任者の頭に強く作用していたことは、抜打ちに敵をたたくということにもまして、敵側が一步先に攻撃して来るのではないかという不安であつた。つまり開戦ともなれば、それ程事態が相互的に緊迫するものであり、角力の「しきり」のような状態となるのである。しかし十二月八日未明の瞬間は、攻勢意思として日本側が一方的に動き、日本軍の先制によつて火蓋が切られた。

この戦争発起の問題を初め、一体戦争は人類から放逐し得るものなりや否や、戦争はどうして起るのか、日本は次の世界戦争の圏外に止まり得るや否や、非武装、戦争抛棄は正しきや、戦争の勝敗決定の要素、戦争の終末等、戦争に関する幾多の本質問題は、凡て既往の戦争の史実を立脚地として検討されねばならぬ事柄である。戦争というものは、一般の科学的研究のみを以てしては割り切れぬところの心の問題、力の問題、術の問題、对手のある所謂勝負の世界にまで深く足を踏み入れなければならぬところに厄介な事情がある。

巻末に掲げたような、あの悲惨な犠牲を払つた戦争を体験したのに、日本の朝野は、その責任の悉くをひとり軍のみに帰し、戦争本質の探究を避ける態度を以て今日に至つてゐる。このようなことで、日本は果して次の戦争の惨禍から免れ得るであろうか。果して文化国家を完成し得るであろうか。われわれは、研究上飽くまで戦争という悪魔と取組み、之と対決することによつてのみ、健かな日本の建設に資し得るものと確信する。これが半生を戦争の中に、戦略指導の中樞の一員として生きて来た私の強い信念であり、拙著がその礎石の一つとなり得るならば望外の幸せである。

刊 行 の こ と ば

成 瀬 恭

本書はすでに昭和二十八年三月鶴書房から四分冊となつて刊行され、当時ベストセラーになつたものである。そして昭和三十一年に、再び同書房から八分冊で刊行された。しかしその経間もなく同書房が解散したため、本書は

絶版となり、わずかに少数が古本屋の店頭で法外な高値を呼ぶのみになっていた。

しかしながら、本書の戦史としての評価は年を経るにつれて高まる一方であり、米国の戦史研究所で全訳して刊行したのを始めとし、フランス、イタリヤの政府所屬の戦史研究所でも英語訳をもとに仏、伊語版として出版されるに至ったことである。

米国のダートマス大学教授であるルイス・モートン博士（元少将）は、一九六二年に米国陸軍省戦史部から発行された「戦略と統帥」という著書の中で本書のことを長々と引用し、「太平洋戦争資料源とその評価」というところで、本書の著者服部氏が「マッカーサー戦史」の日本側戦史の項で執筆した部分よりは、はるかに迫真力に富み、高い水準の史観に立つ戦史であり、資料としても第一義的価値を持つものであると激賞している。

海外ばかりではない。戦後国内で出版された第二次世界大戦に関する歴史書で、その資料源を本書に負わないものは皆無に近いと思われる。さらにまた、終戦を二十歳台に迎えた若者は今や四十歳台の働き盛りとなり、四十歳台の中堅幹部クラスの人々は六十歳台の静かな老境に入り、それぞれ戦後二十年の歴史と共に生き、冷たく、苦しい平和を体感してきた。そしてようやくして大東亜戦争敗戦の事実の究明と教訓化が、正しい時点に立つて、正しい史実をもとにして、分析され、批判され、総合さるべき機運が熟しつつあるように思われる。本書の発刊が新聞広告に一度発表されるや、全国各地から嵐のような問い合わせが集まつてきたことが、なによりもその明らかな証拠である。

ここに終戦二十周年を記念して、再び改訂増補の筆をとり、永久に保存さるべき決定版として世に送るにあたり、本書が広く心ある人々によつて読まれ、正しい史観の培養に資するとともに、生々しい戦争の史実が、新しく生まれた若い人々の世代に正しく語り継がれんことを祈つて止まない。

刊行のことばを結ぶにあたり、故ケネディの就任演説の中の一部を引用させて戴きたい。

「われわれは、今日われわれが最初の革命の継承者であることを、ゆめ忘れるものではない。いまこのとき、この

場所から、友に対しても敵に対しても、一様につきの言葉を伝えようではないか——たいまつは新しい世代の米国民にひきつがれた——と。それはこの世紀に生まれ、戦争によつてきたえられ、冷たく厳しい平和によつて訓練され、われわれの古い遺産を誇りとし、この国がつねに擁護することを誓つてきたもろもろの人権、そして、今日われわれが国内ならびに世界において擁護することを誓つているもろもろの人権が、次第に葬り去られるのを目撃、もしくは容認することをいさぎよしとしない新しい世代の米国民である。」

七月二十八日記